



春日小だより

令和8年1月30日
練馬区立春日小学校
校長 後藤 京子
学校通信 2月号

100年の積み重ね

副校長 市村 大

最近、ゆっくりとテレビを見る機会も減りました。録画してもなかなか見る時間が取れないので、自然と遠のいてしまった感じです。しかし年末に、久しぶりにバラエティー番組を2週連続で見ました。某番組で、芸人が無理やり探偵にさせられ、謎を解いていくものです。よく考えられており、純粋に面白かったです。そして、愉快に見ていた番組の中で、思いがけず、すごく考えさせられる場面に遭遇しました。

100年前の1925年にタイムスリップした場面で、登場人物の男性と探偵役の芸人が口論のようになるところがありました。当時の価値観で、「女のくせに黙ってろ」「選挙権もないくせに」と、女性を下に見る発言を繰り返した男性に対し、「俺の時代じゃ許されへんぞ」「俺らの時代は、新しい総理が女性になろうとしてんやぞ」と言い返しました。もうテレビを見ながら、感動の域にまで気持ちが達しました。このやり取りに、日本が歩んできた100年の歴史がぎゅっと詰まっていたと感じたからです。

1925年は、大正末期。この年に2つの大きな法律が生まれました。一つは治安維持法。これが後の戦争に向けて、大きな意味をもちます。もう一つが、普通選挙法。それまで、選挙権は一定の税金を直接収めている男性にのみ与えられていましたが、この法律により、25歳以上のすべての男性に選挙権が与えられました。

ここで注目すべきは、普通選挙法に女性が含まれないということです。番組中の「選挙権もないくせに」というのはこの事実とつながります。「女性が政治に参加する」というのは、この時代では非常識なことでした。では、女性が政治に参加することを求めている人が全くいなかったかというと、そうではありません。婦人参政権を求め、平塚らいてう・市川房枝といった人々が活動していました。男女平等が夢のまた夢のような時代に、その理想を追い求めた人々がいたのも事実なのです。その運動は、激動の戦争期を経て、戦後に実を結びます。1946年4月の衆議院選において、初めて女性が選挙に参加し、39名の女性国会議員が誕生しました。そして、それから約80年後、ついに日本で、女性の総理大臣が誕生したのです。100年前の人々のほとんどは、日本に女性の総理大臣が誕生するなど想像もしなかったでしょう。でも、時代は動きました。100年の積み重ねで、当時の非常識は変わったのです。

さて、2026年に戻って考えてみましょう。春日小では、2月20日に研究発表会を控えています。研究の中心には「ESD（持続可能な開発のための教育）」があります。ESDにはなじみがなくても、SDGsは多くの方がご存じだと思います。SDGsには17の目標があります。

「1 貧困をなくそう」「4 質の高い教育をみんなに」「10 人や国の不平等をなくそう」「16 平和と公正をすべての人に」などです。正直に考えてください。これらの目標は実現可能でしょうか？目標としては大切だけど、本当に実現できるかな…それが本音だと思います、2026年の。だって、世界中で戦争しているし、経済格差は広がるし、環境汚染だって止まってないし…。実現を目指したいけど、理想は遠くにあります。

でも、100年後はどうでしょうか。人間は、100年かけて夢のまた夢を叶えました。それを実現させたのは、困難な現実の先に理想を描いて動き続けた人々の思いです。私たちは教育を通して、子供たちに、自分たちの未来を創るために必要な力を付けていきたい。この研究には、その思いが込められています。創りましょうよ、希望溢れる未来を。

2月20日、多くの皆様に、私たちの思いが伝えられるように頑張ります。